

心理学研究者と現場との関り

—— 田中教育研究所と鈴木清博士 ——

名取 洋典・鈴木 朋子・高砂 美樹

はじめに

田中教育研究所（略称は田研）は、1948(昭和23)年に、第二次世界大戦後の国の再建として教育の復興のための教育の科学化を目的として設立された民間の研究機関である（日本教育新聞社, 2014）。第二次世界大戦後、田中寛一¹が学長を務めていた玉川大学に、鈴木清が教授として、品川不二郎²が助教授として着任し、玉川大学内の教育研究所で研究を行っていた。日本文化科学社³から声をかけられ、教育研究所は上野にあった日本文化科学社の建物の二階に移った（鈴木他, 2011）。研究所は、1948(昭和23)年に日本文化科学社の付属として設置された際には日本教材研究所という名称で、1951(昭和26)年に田中教育研究所に改称された。1959(昭和34)年に財団法人として認可を受けた。1965(昭和40)年、田中教育研究所直属の出版部門として田研出版株式会社⁴が設立され、2012(平成24)年には公益法人制度の施行に伴い一般財団法人田中教育研究所となった（田中教育研究所, 2023）。表1に田中教育研究所の歴代所長、表2に1972年の研究所要覧にある研究所職員の名を示す。表1にある歴代所長は、初代の田中寛一を除いて全て東京文理科大学・筑波大学⁵の出身者だが、表2にある所員は京都大学など他大学の出身者も含まれている。

江口(2010)の『教育測定の世界史』によれば、第二次世界大戦後、田中寛一は日本教材研究所において、若い研究者とともに研究活動を展開したが、研究の成果が実際に用いられるためには、単に理論的な特徴を説明するだけでは十分ではなく、その研究が教育実践にどのように用いることができるのかを説明する必要があると述べられている。そして、戦後の新教育において、知能検査や学力検査の利用が積極的に

表1 田中教育研究所の歴代所長

初代	田中 寛一
第二代	鈴木 清
第三代	間宮 武
第四代	田中 英彦
第五代	杉原 一昭
第六代	杉原 隆

表2 1972年の田中教育研究所所員一覧（1972年田中教育研究所要覧より）*

所 長	鈴木 清
副 所 長	関西支部長 四方 実一
副 所 長	田中 英彦
名誉所員	長谷川 貢 田崎 仁
	佐藤 正 間宮 武 津留 宏 品川不二郎 渡辺 秀敏 林 保 清水 利信 岡本 夏木 森上 史朗 北尾 倫彦 加賀 秀夫 河井 芳文 杉原 一昭 杉原 隆 藤巻 公裕
所 員	

* 田中教育研究所要覧は、田研出版高橋一紀より提供を受けた。

進められる中で、教育測定研究に取り組んでいた心理学者は、知能検査をはじめとする測定法を開発するだけにとどまらず、学級の教育方法や児童の指導法を扱うようになっていたという。江口(2010)は、この取り組みは、アメリカから教育評価法が紹介されたことが一因にあることを認めつつ、東京文理科大学の教育相談部を中心とした戦前の教育測定運動を引き継いだものと述べている。しかしながら、日本教材研究所（後の田研）の設立時のメンバーの思いを知ることができる資料は多くはない。

今回、検査開発者オーラルヒストリーを収集するなか⁶で、財団法人として認可を受けた当時の田中教育研究所のことを知る高橋徹にインタビューをする機会を得た。高橋徹は1935(昭和10)年生まれ。1959(昭和34)年、東京教育大学(特殊教育学科)卒業。同年、田中教育研究所へ研究員として就職。1965(昭和40)年、出版部門が独立し田研出版となった際に出版社員となり、『新訂版田研・田中ピネー知能検査法』(1970)、『全訂版田中ピネー知能検査法』(1987)の出版に尽力した。元田研出版株式会社相談役である。就職した当時の所長は初代の田中寛一であったが、実質的なトップは第二代所長の鈴木清であった。高橋には主に、鈴木とのエピソードについて尋ねた。語られるエピソードから田中研究所設立当時のメンバーの思いを知ることができる考えたためである。

鈴木清は1906(明治39)年に静岡に誕生。1931(昭和6)年、東京高等師範学校文科第三部(英文科)卒業。東京高等師範学校で所属したテニス部の顧問が田中寛一であり、心理学を専攻することを勧められた。鹿児島の中学校で2年ほど英語の教諭として勤めた後、1933(昭和8)年東京文理科大学に進学し、田中寛一、武政太郎⁷に指導を受けた。1936(昭和11)年に大学を卒業し、東京府立第一高等女学校の高等科に教諭として就職。1939(昭和14)年、東京文理科大学助手、東京高等師範学校助教授を兼任し、1946(昭和21)年、玉川大学に教授として着任した。1950(昭和25)年には、横浜国立大学に教授として着任した。1955(昭和30)年、東京教育大学体育学部教授、1970(昭和45)年に退職に伴い名誉教授となり東京女子体育大学学長に着任、1980(昭和55)年に退職した。1982(昭和57)年逝去。

当時の状況を知る当事者の証言は、貴重な資料であるため、一切を省略せず、発言も表現されたまま掲載する。なお、人物名の敬称は論文の慣例に従って省いた。

高橋徹へのインタビュー

インタビュー日程：2023年2月23日(木) 13時～14時半

場所：オンライン Zoom にて

インタビューー：高橋徹(元田研出版株式会社相談役、一般社団法人田中教育研究所理事)、(Zoom 操作補助：高橋一紀(田研出版株式会社常務取締役)

インタビュアー：鈴木朋子、高砂美樹、名取洋典

1959(昭和34)年頃の田中教育研究所

高橋：私は昭和34年に教育大を出ました。専門は特殊教育です。知恵遅れの子とか耳の不自由

な子たちと一緒に一所懸命遊んで4年過ごしました。いろんな教育方針、教育のことを言う人がいるんですが、どれも信用できなくて、もっぱら子どもたちと遊ぶことに徹していたような気がします。

昭和34年に卒業して、その時は財団法人ではなかった田中教育研究所に入りました。昭和34年まで田中教育研究所は日本文化科学社の一部門で、独立してなかったんです。田中寛一先生は高齢で週に1回、研究所へ来るぐらいで、もっぱら鈴木清先生が所長代理としてみんなをまとめていらっしゃいました。その後、鈴木先生たちがいろいろ考えて、田中教育研究所を財団法人にしようということになりました。そして日本文化科学社とは一応独立したことになりました。だから財団法人田中教育研究所は昭和34年ごろにできたんだと思います。僕は入所してまだ一番下だったので詳しいことはよく分かりませんが、財団法人になったお祝いをした記憶はあります。

所員は日大の長谷川⁸先生とか、間宮⁹先生、田中英彦¹⁰先生（田中寛一先生の息子さんです）、それから品川不二郎先生、清水利信¹¹先生などです¹²。所員会議っていうのは1週か2週、たぶん2週のうちに1回、月に2回ぐらいやられてたんですが、その時は鈴木先生が座長になられて皆さんをまとめられました。

大学の先生を前にして言うのは申し訳ないんですが、何しろ議論してるといつまでもやってるんです。鈴木先生はじーっと我慢なさる方でした。で、最後に終了、集約されるのが本当にお上手な方でした。ただ、僕なんかだと気が短いからさっさとまとめちゃえばと思うのですが、なかなかなさらない方だったです。皆さんがもう議論にくたびれた頃まとめられるというような感じでした。

道徳教育について

鈴木先生のお仕事は文部省関係が多くて本当にお忙しい方だったです。指導要録の改訂などの時にはほんとに大変だったし。

鈴木先生が一生懸命やられたのが道徳教育だったのです。

鈴木：鈴木清の博士論文が確か道徳教育だったと思います。

高橋：はい。その頃ほら、昔やっていた修身がなくなって道徳的なことを教えるところがないということで、やっぱり道徳教育をやろうという気になったんでしょうね。道徳教育はだいぶん熱心にやられて文部省で講習会やったりしてました。

田中教育研究所主催でも道徳教育の講習会をやったことがあるんですが。その時、御徒町の松坂屋の上に400人ぐらい入るホールがあったんですが、もう満タンだったですね。現場の先生も何か糸口が欲しいということで悩まれてたんじゃないかと思います。その時に、文部省とか教育委員会の講習会ではほとんど発言がないんですけども、民間の講習会はみんな気楽ですから、いろんな先生がいろんなことを発言なさって、紛糾しましてなかなか終わらなかったことを記憶しております。

鈴木：その講習会は、鈴木清以外の先生もいらっしゃっていたんですね。

高橋：はい。間宮先生もお話しなさいました。その当時は、現場の先生方も道徳教育しろって言われても、何をすりゃいいんだか分かんなかったんじゃないかと思うんです。それで何かヒント

が欲しいってということで大勢いらっしゃいました。

専門外のことになるんですけども、やっぱり一番僕が聞いてて盛り上がったのは、「意識と行動のずれ」をどう把握するかっていうこと。それは現場のいろんな先生がいろんなことを言われましたね。意識っていうのは絶対見えないし測りようがないから、やっぱり行動で測るしかないんだと。道徳的な行動がちゃんととれてるかどうかっていうことが問題で、意識がどうかっていうことまではとても分からないと。ところがある先生は、ちゃんと分かてるんだけども実行できない子がいる。それをちゃんと評価しなくちゃ駄目なんじゃないか。もう一步「ぽっと」押してやれば、例えば目の前に年寄りが来た時にすっと立ち上がって席を譲れるのに、もじもじして譲れない子がいる。その辺のことをどうやって把握するのかっていうことで、すごい盛り上がった記憶があります。

鈴木：その議論は難しそうですね。結論は出たのでしょうか。

高橋：鈴木先生が最後にまとめられたのは、ぽっと立てないのはやっぱり意識がそこまで行っていないんだと。普通の知識だけなんだ。腹の底から分かれば立ち上がるんだ。腹の底から分かるような教育をしなくちゃいけないっておっしゃってましたよ。なるほどなと思って。僕も気持ちはあるんだけど実行できないのは、やっぱりちゃんと分かってないからだなって、そんな気がしました。

東京都高校入試改革について

高橋：あと、鈴木先生がおやりになった仕事は東京都の高校入試改革。僕はどうして鈴木先生がおやりになったのか分からないんですけども。

鈴木：何でなんでしょうね。

高橋：東京都が日比谷高校とか小石川高校とか名門の高校に殺到するんで、それを何とかしなくちゃいけないっていう時代だったんです。それで鈴木先生、ほんとにこれは苦労なさったと思うんだけど、学校群¹³、要するに日比谷高校はこここの子しか行けない、新宿高校は新宿区とここの区域しか行けないっていうふうにして学校群制度を作って。日比谷高校とか小石川高校、有名な高校に集中するのを避けられた、そういう制度を作ったことがあります。それは数年後には元へ戻りましたが、大変だったですね。そうしないと日比谷などのナンバースクールに全部集中しちゃって、そこは何十倍になっちゃって、それ以外は何倍にもなんないっていう。それを何とかしたいっていうのが鈴木先生です。鈴木先生が座長でおやりになって、はたから見ても随分苦労なさってるなっていう気がしました。

鈴木：学校群に分けた時も、鈴木清は田研に勤めていた時代ですね。

高橋：はい。うちの研究所の所長をなさってます。

鈴木：学校群に分けるのは、何で声が掛かったんでしょうね。

高橋：文部省の推薦ですよ。誰か中心になる先生が欲しい。埼玉県のもやったんですから。

鈴木：心理学者が駆り出されるのが不思議ですね。

高橋：やっぱり英語の力じゃないですかね。それと鈴木先生を知っている現場の先生方が多かったんじゃないですかね。いろんな先生方が候補に挙がっても、やっぱり鈴木先生。東京都も鈴木

先生、埼玉県も鈴木先生ってなっちゃって。何でそんな一番大変なことを、あっち行ったりこっち行ったりやるんですかと、僕は見ていて思っていましたね。心理学は関係ないような気がします、道徳教育はありますけど。

鈴木：鈴木清の業績を前に調べていた時に、道徳について博士論文を書いたっていうのは知りました。博士論文執筆の際、当時はワープロなかったから、長男がちょうど大学生で周りに大学生が多かったから、友だちを家に連れてきてみんなに博士論文を清書させたっていう逸話が残っています。

高橋：大変だったですね。

鈴木：鈴木清は、道徳教育、体育心理学の研究以外は、いろんなことをしていた人だったみたいだけどよく分からないところがあるのです。

高橋：その文部省の仕事をしたのは、あの当時、何だか僕らは全然分からなかったけども、カウンセリングとかガイダンスとか横文字がいっぱい出てきて進駐軍から押し付けられるんですよ。普通の先生、分からないですね。ガイダンスって何だって、カウンセリングって何だ。これ、パッと分かる方っていうことだったんじゃないかな。

鈴木：鈴木は玉川大学でアメリカの教育の報告書、『日本教育改造案米国教育使節報告書』を1946年に出版しているんです。アメリカ側の民主主義教育を日本に持ってこようとしたもの、新教育の流れで、日本の教育の中では生徒指導とかガイダンスとか、上から教育で押し付けるんじゃないくって、子どもの個性やいろんな意見をくみながら教育をしていまいしょうという流れが出たんだろうと思うんです。その流れで教育側に入っていっただけでしょうかね。心理学者の仕事とはちょっと違う流れのような気はするんですが。

筑波大学の心理学

高橋：僕、ずーっと不思議に思ってたんですが、その文部省の仕事か何かで鈴木先生がこんなに活躍されてるのに、いわゆる教育大学の心理学教室には戻ってこられなかったんですね。戻ってこられた時は体育の心理学で、劣等感か何かをおやりになってたんです。どうしてかは鈴木先生に聞き損なっちゃったんですが。本当は鈴木先生は田中寛一先生の第1番の弟子ですので教育大学の心理学教授になるはずだったんじゃないかなと思ってますが。あるいはあんまり活躍なさるんで反対するグループがあったのかもしれませんが。それはよく分かりません。

鈴木：田中寛一の弟子は、筑波のほうではどうなのでしょう。

高橋：僕らの時にはもう鈴木清先生しか知らないですが、後藤岩男¹⁴先生とか。

鈴木：高砂先生、いかがでしょうか。

高砂：杉原¹⁵先生の教育心理系の流れが一つ筑波の中にあるはあるんですけども。高橋さんの指導教授に当たる方、指導教官は、特殊教育だとどなたに当たるんですか。

高橋：僕は生理学の寿原¹⁶先生。

高砂：寿原先生ですか。

高橋：はい。おっかなくて、おっかなくてね。

高砂：分かります。私、実は岩原信九郎¹⁷のずっと下のほうの弟子なので。そういう意味で寿

原先生もちょっと伝説の人でしたけど。そうですか。

高橋：はい。

鈴木：ありがとうございます。筑波の教育心理は、杉原先生が継がれたんですね。

高砂：2つあるんですけど。田中先生ともう1人、武政太郎。武政先生は国のいろいろな施策で大学辞めざるを得なかったんですよ、確か。東京教育大というか文理大を辞めなければならなかったの。そちらがどういうふうに一本化されたのかは分かってないんですけど。ただ、上武¹⁸先生とか周辺の方、随分いらっしゃいましたよね。原野¹⁹先生、まだ当時は帰ってきたばかりかちょっと分からない。原野先生ってうちの父の同級生なんですけど。もうだいぶ前にお亡くなりになった。

高橋：僕、入った時には助手ぐらいだったです。

高砂：そうだと思います。それで、それこそ教育相談じゃないですけど、そういったものが、ちょうど最初の頃でドタバタしてるというようなことを他の方が言われてた記憶があるので。教育大といってもいろんな講座がある中で、どういうふうに皆さんが子どもの教育相談に関わったのかっていうのは、ちょっと一般化できないイメージがあるんですけど、その辺りどうでしょう。

高橋：いや、分からないですね。小保内虎夫²⁰先生ってのがいましたからね。

高砂：はい。小保内先生も私の先生の先生ですから。

高橋：あと、教育心理系だと、辰野²¹先生とか。優しい先生も多かったです。

高砂：はい。辰野先生も長い歴史をお持ちで。弟子がたくさんいらっしゃいましたけど。

雑誌『臨床心理』と『教育心理』

高橋：その頃、鈴木清先生は雑誌で『臨床心理』とか『教育心理』の編集長をなさいました。『教育心理』はその後もずっと続いたんですが、『臨床心理』は惜しいことに2～3年で廃刊っていうかやめられたんです。本当は『臨床心理』のほうが面白かったんです、読んで。『教育心理』はあんまり面白くなかった。『臨床心理』がいろんな、ノイローゼの人とか、その当時はノイローゼって何て言ったかな、神経衰弱の人の悩みを聞いたり、いろんな記事があったような気がしています。

文学博士のことですが、この頃ですよ、博士号のあとに何々大学っていう名前が付くようになったのは。だからこの頃より前の時代は、文学博士は文学博士でよかったんですけども、よく分かりませんが今は何々大学っていうのが付くんじゃないでしょうか。それでなにも大学名が付かない文学博士になりたいっていうんで、この頃博士号を取られる方がいっぱいいたんです。研究所では鈴木先生もそうだし、品川先生もそうだし、間宮先生もそうです。その頃、文学博士をお取りになったんです。だからその後、例えば教育大学の文学博士とか横浜国大の文学博士っていうふうになったんじゃないかと思います。それこそこの頃は大変でしたね、先生方は。みんな先ほどの話のように代筆して書かないと間に合わないぐらい大変だった。

鈴木：話を少し戻していいですか。『臨床心理』の雑誌なんですが、鈴木清の書庫にはあって、横浜国立大学図書館も1冊だけ、第1巻第1号が入ってるんですが、国立国会図書館に入っていないんですよ。すごく珍しい雑誌だなんて思いながら見た覚えがあるんですけど。あれは何で

終わっちゃったんですかね。

高橋：大体こういう雑誌の最低限発行、売れなくちゃいけないのが4,000部か5,000部なんです。『教育心理』もそんなに行ってないです、4,000部も行っていない。だからぎりぎり。『臨床心理』は2,000ぐらいだったんです。だから少なかったんです、その当時。

鈴木：そうなんですか。『臨床心理』の研究会か何かが出してましたっけね。その研究会のメンバーが塩入先生など、医者と教育関係と心理とが一緒に編者の中に名を連ねていて。当時としては画期的で面白い雑誌だったんだろうと思うんですけど、なぜかあまり国内で見つからず、すぐ廃刊になっているのもったいなかったなと思いました。

高橋：随分これ、社員の中でもやめるの惜しいってんで頑張ろうっていうのがいたらしいんですけど。もう数年頑張れば続いたんですよ。

鈴木：その後、臨床心理学のブームが起きて力を持っていきましたから、あともうひと踏ん張りだったんですね。

高橋：残念だったです。

鈴木：残念でした。ありがとうございます。『教育心理』はその後どうなったのでしょうか。

高橋：『教育心理』は日本文化社がずっとやってまして、その後明治図書に移って『教育心理研究』という雑誌になって、それもなくなってます。

鈴木：ああ。これもなくなったんですね。

高橋：『教育心理』も今はもうないんじゃないかな。はっきりしたことは分かりません。その頃はこの雑誌『教育心理』は現場の先生が買ってくれてたんです。今の先生方はなかなか買ってくれないから。とても4,000部、5,000部は行かないですね。

鈴木：ありがとうございます。

鈴木清が開発に携わった心理検査

高橋：鈴木先生は幾つか検査をお作りになりました。この「精神健康度検査」というのをまず作られたんです。これはとても……僕の入った年から始まって、1年後でできた検査ですけど大変いい検査で、中学校、小学校ではだいぶ使っていただいたんですけど。

結局難しいのは、精神健康度検査をしてちょっとこの子に問題がありそうだって分かった時に、どうするかっていうところまでなかなか行かないんです。今はカウンセラーとか何かがいていろいろやってくれますけども、その当時はそういう体制もないし。学校長とか教頭、教務主任クラスでも精神的にちょっと困ってる子がいたらどうしたらいいかっていうことに対してのアドバイスが担任にできなくて、本当に残念な思いをしたことがあります。

鈴木先生とか間宮先生たちが講演に行くと質問がいっぱい来ます。精神健康度検査でこういう子がいるけどどうしたらいいのかとか。でもさすがの鈴木先生、間宮先生たちでも即答はできないですね、子ども見てないし。一般的なことを話すだけなんですけども。

今はもうなくなっちゃってますけども、この検査は本当にいい検査だと思います。ただ使い方がちゃんと指導できれば、今みたいにカウンセラーが学校にいてこの検査を使っていれば相当役に立ったと思います。今でも結構、高校の進学校でも悩んでる子どもが多いですから、な

かなかそこまで目が届かないでおかしくなっちゃうんですが、こういう検査があればいいなと思ってます。

「向性検査」も鈴木先生が中心になってお作りになった。これは外向性、内向性を見るんでそれほど臨床的な意味はないんですけども、簡単に「おまえは外向だ、内向だ」なんて子どもたちが喜んでやってた検査です（笑）。

それからもう一つ鈴木先生が作られたのが「非行傾向検査」。この検査は北海道の教育大の大黒²²先生が非行……少年院を一所懸命回って歩いて。そしてこの少年院に残念ながら入ってる子たちがどんな子どもが多いかと言葉の調査をなさったんです。それで少年院の子どもの発言は警察とか何とか何とかという言葉が非常に多い。その言葉でもってこの子の非行、問題傾向が分かるんじゃないかっていうのが最初の発想だったです。

それでお作りになったのですが、北海道でガリ版刷りで配ってるだけじゃもったいないから全国的に評価を見たいということで研究所がお手伝いすることになって。鈴木先生が代表で大黒先生の実稿を見ながら、手紙や電話で相談してまとめられたのがこの検査です。名前は非常にどぎついんですけどもこれが本当によく、妥当性を調べるとかなり高いんです。やはり現場の少年院に歩いて子どもたち、青年たちのことをよく調べられてから作られた検査だなという気がしています。

ただこの非行傾向検査っていうと子どもが、特に中学、高校の子どもたちはぎょっとしてテストやらなくなっちゃうんで、どういう名称にしたらいいかと悩み「delinquency」のdelを取って、略称「DEL」という検査にしたんです。これ、鈴木先生の発想です。非行傾向検査って言わないでDEL検査。今も高校で使ってる所があります。非行検査だけはもうなくなってますけども、別の形で生き延びてる検査です²³。やっぱりこういう精神健康度にしろ非行傾向検査にしろ、知能検査ももちろんそうですけども、妥当性を調べるのが本当に重要なポイントになってまして。いろんな検査では、妥当性のところに今まではほとんど力を入れてなかったんですけど、この非行検査だけは随分妥当性を調べました。この非行傾向検査の結果、点が高い子は実際どんな子なのかを800人ぐらい調べて、そのうちの何百人は問題があったとか、そういう子があったとか、そういうことを大黒先生も一所懸命調べられて。当時では、そこまで妥当性を調べたことはないです。そういう意味で長く使われたと思います。「delinquency」のdelを見るたびに、これは鈴木先生がパッと「DEL」ってお決めになったっていうことはよく思い出しております。

田中ビネー知能検査法の改訂

鈴木：鈴木清は「田中ビネー」の改訂も関わっていたのでしょうか。

高橋：田中ビネーの改訂のチーフですよ。ご自分じゃ出て歩かないんですけども、助手とか学生たちがやってきたデータを集めて、それでやりなさいということで。鈴木先生がおやりになった頃は、鈴木ビネーと同じように小さな箱、このくらいの箱にまとまっちゃうぐらいの検査だった、田中ビネーは。鈴木ビネーと同じぐらいです。今はこんなに大きくなってます。

鈴木：なりましたね。

高橋：僕個人としては大きくなるのはあまり賛成じゃないんだけど、担いで検査をしにいくわけ

ですから。

鈴木：新訂版の、昭和 45 年の田中ビネー（『新訂版田中・田中ビネー知能検査法』）辺りから関わっていたんでしょうかね。

高橋：そうです、昭和 45 年の改訂です。87 年版（『全訂版田中ビネー知能検査法』）は若い方が中心になってます。昭和 45 年は鈴木先生です。鈴木先生とか学芸大の辰見²⁴先生とか、そういう先生たちが。ただ辰見先生は、何かいざこざあった時に怒って辰見ビネーって出したことがあるんですよ。

鈴木：見たことあります。いざこざがあった時なんですか、あれは。辰見ビネーも武政ビネーもあるんですよね。

高橋：武政ビネー。

鈴木：図書館によっては保存されてて、見てみたらあんまり変わらない。もちろん元がビネーなので変わらないんですけども。カード型で持ち歩きが便利だったりといった検査でした。その辰見先生とはどんないざこざがあったかっていうのは伺ってはまずいんでしょうかね。

高橋：辰見敏夫先生は物事をはっきりおっしゃる先生なので、所員会議でいろいろもめた時に、援軍がなかったんです。それで研究所の所員会議に出てこなくなっちゃって。で、自然に分かれたという感じになってます。

鈴木：そうなんですか。

高橋：なかなか、僕も何回も怒られたことがありますけど、怒られながら面白い先生で（笑）。「田中ビネーは俺が作ったんだ」なんて怒られちゃって。じゃあ先生、いなくななんないでください。

鈴木：昭和 45 年の田中ビネーの時、標準化のための検査の協力者はどんなふうにしたのでしょうか。というのは前、品川先生に WISC の時の標準化の手続きを伺ったら、「卒論生が取ったデータを標準化に使った、大変だった」という話を伺ってちょっと面白かったもので。この頃は、どうされてたんだろうと。

高橋：僕が知っている範囲じゃ、僕が入った頃は、田中研究所にテスターが 10 人から 20 人いたんです。それでいろんな幼稚園とかいろんな施設に教育委員会から頼まれたりなんかして出掛けていく。要するに正規の社員じゃないんですけども、出掛けていけば日当も幾らっていうふうにお礼して。ちょうど女子大を出たお嬢さん、お嫁に行く前のお嬢さんたちにちょうどいいアルバイトだったです。だから 20 人ぐらいいはいてあっちこっち、ほんとに毎日のようにテストに行っていました。そういう感じでデータが、黙ってても集まってきたんじゃないでしょうかね。そのあたりは大変なんです。その組織がなくなってからは大変。

鈴木：今、標準化作業はどこも大変だと聞きます。どのテストを作ってる方からも。

高橋：当時は特殊学級ができて大騒ぎしてる時代だったので。いわゆる特殊学級（今、特別支援って言ってますけども）に行く子どもたちのためにテストしに行く機会が非常に多かったです。だからそういう子のデータはよく取れたですね。今は難しいです。

鈴木：なるほど。

高橋：今はそういうデータ取りたいと言っても、受けてくれる子がみんな発達が進んでいる点数の高い子なんです。だからどうしても低い子を見なくちゃ、田中ビネーのどこが引っ掛かるかっ

ていうことを調べなくちゃいけないので、それはなかなか難しくなってます。

鈴木：その時代にいろんな人に実施できたというのは、田研の抱えるテストの活躍と、他に教育委員会とのつながりがあったりしたんでしょうかね。

高橋：教育委員会とのつながりはだいぶありました。要するに特殊学級に入れなくちゃいけないかどうかというテストをしてくれというのが教育委員会ですから。その教育委員会に行って、そうじゃなくて普通の子もやりたいんだということで普通の子を紹介してもらうとか。現場の先生も本当の標準化した数値はないんですけども、こういうところが良くてこういうところがまだですよっていうような情報はもらいますねっていう感じで、お知らせできることはお知らせして。ただ、最後にIQ 幾つまではとても無理ですから、実験ですから、しないで。結構テストはフル回転するぐらい忙しかったですよね。だから僕も品川先生たちの話²⁵を読ませていただいたんですが、実際やったのは研究所のテストですよ（笑）。

鈴木：そうですね。

高橋：僕は知ってますから。だから僕は WISC は研究所が随分力を入れたのになっていう気は今でもしてます。

鈴木：あの時代はまだ、日本文化科学社とはそんなに分かれてなかった時代ですものね。

高橋：はい。

1960年代に作られた多様な心理テスト

鈴木：テスト全盛期が鈴木清の時代だったんだろうかと思うんですが。1970年代ぐらいでしょうか。

高橋：そうですね。70年ビネーを出した、それよりちょっと前ぐらいですね。本当に出せば売れるっていう感じで。だから特に読書力の検査とか、それから鈴木先生が力を入れられたのは道徳性の検査ですよ。

鈴木：ああ。

高橋：学習指導要領の道徳の1項目2問題を作られて。それで結構、今見ても面白い検査ですけど、それもなくなっちゃっているかもしれません。鈴木先生が最後に目を通される検査っていうのは大概どっかにユーモアがあるんですよ。

鈴木：探してみます。横浜国大の古い検査を見ていたら、レコードが付いた音感検査のようなものがあって驚いたのですけど。

高橋：音楽素質診断検査²⁶。

鈴木：あれは心理学なんでしょうか。

高橋：あれは音痴を見つける検査なんです。

鈴木：それは売れたんですか。

高橋：いや。売れないからすぐ2年ぐらいで駄目になったと思います。

鈴木：大切に、大学の中では取っておくようにします。ありがとうございます。

鈴木清による各種学校協会の顧問

高橋：鈴木清先生は文部省から推薦されて各種学校協会の顧問をなさいました。その頃の各種学校協会はいろんな、いわゆる各種学校、お料理の学校とか裁縫の学校とかそろばんの学校とか、そういう学校がいわゆる各種学校で。団体として東京都に陳情するとか文部省に陳情するとか、いろんなことをお願いしに行くっていう組織じゃなかったんです。皆、てんでばらばらだった。それを鈴木先生がそういうのでは、やっぱり学校としての格好がつかないから、みんなで各種学校協会っていうものをつくって、そしてその中でいろいろ対応を練ったほうがいいっていうようなアドバイスなさって、その関係が顧問になられている。その頃ですよ、各種学校が活躍し始めたのは。いわゆる各種学校を出ても幼稚園の免許がもらえる、保育園かなにかの免許がもらえるとか。理容学校とか美容学校ではちゃんとした資格を得られるとか。

それから本当に半分笑い話なんですけど、最初床屋さんの学校の教科書を作ったんです。床屋さんになろうと思って勉強している若い人たち向けの教科書を作ったんですが、それを学芸大の河井²⁷先生とかいろんな先生に頼んで教育学とか教育心理学とか青年心理学のテキストを作った。

ところが原稿を書く先生は各種学校とはどんなレベルかわかりません。こんなこと言ったら怒られるけど、難しいんですよ、理容、床屋さんになろうとしてる青年たちにとっては。それで何回か改訂してだいぶ柔らかくなったんですよ。今はきつといい本になってると思います。教育心理学なんか正規分布持ってきて説明なんかしてるから、全然分らないですよ（笑）。

鈴木：難しい、分らないですね。

高橋：分らないですよ。人気があったのはこの青年心理学だった。やっぱり自分たちの気持ちがよく分かるから。それも何回か改訂して、今たぶん、その青年たちのためになるようないい本になってると思います。最初は難しかったです。要するに大学の教科書みたいになっちゃっている。そういうこともやられていたし、何でこんなに鈴木先生、忙しいんだろうと思って。ほんとに感心するぐらいだったですよ。

鈴木清とスポーツ

高橋：それからやっぱりスポーツマンでしたから、テニスをおやりになる、ゴルフもおやりになる。僕は一番びっくりしたのは水泳ですよ。

鈴木：聞いたことないですね。

高橋：鈴木先生のお知り合いの方で大きな会社の社長さんの別荘に招待されたことがあります。みんなで行って、大変ごちそうになったことがありました。おいしさだけ覚えてるんですが。

その時葉山で泳いだ。女性たちも男も。その時鈴木先生が泳ぐのでびっくりしちゃったんです。鈴木先生は細身の人だと思ってたら、体はすごいです、裸見ましたから。僕も水泳はかなり自信があったんですけど、鈴木先生、ずっと後ろにくっついてくるんですよ。心配になって、「先生早く帰しましょ」って言ったんですが、水泳も随分やられましたね。

鈴木：テニスは田中寛一先生もテニスをされて、心理学者がみんなテニス部であったのは聞いたことがあります。

高橋：はい。間宮先生もそうです。品川先生はバレーか何かじゃないかな。

鈴木：そうなんですか。品川先生は確かにテニスのお話出ませんでしたね。

高橋：あとは、所員会議終了後、皆さんで夕食をなさる。その時の鈴木先生は面白かったです、いろんなお話が。間宮先生はもっと面白いし。僕はほんとに、僕よりも僕のおやじぐらいの年配の先生たちがいるのに、所員会議をかんかんがくがくやって、その後ビールを飲んでお酒を飲んで、面白い話盛んにされて。その後ナイトーに行くんですよ、大塚からタクシーで後樂園球場（ドーム）へ。

鈴木：へえ。

高橋：うちへ何時に着くのかなと思って、僕、さすがに心配したことがあります。ナイトーも、この時間に出たら7回ぐらいから見られるとかいってナイトー行つて。それから東京駅行つて湘南電車に乗るんですから。あれ、その日のうちに着くかどうか。そういう大変面白いことがあって。所員会議そのものよりも夕食会が楽しくて。楽しい酒を交わしていました。この先生たちがみんなお酒を飲めなくなったら……と、杉原一昭先生に聞いたことあるんですよ、杉原先生はじめ新井²⁸先生とか真面目な先生ばかりだから、「どんなお話したらいいでしょうか」って言ったら、間宮先生がこう言つた、鈴木先生がこう言つたっていう話をすればいいんだって（笑）。ほんとに面白かったですね。

鈴木：へえ。

高橋：鈴木先生が、面白い歌を歌われていた。

鈴木：講演に行くとその土地の歌をすぐ覚えて踊りを踊ったとか、そんな話は聞いたことがあります。

高橋：はい。歌はいっぱい覚えて。いわゆる小学校唱歌から、それからちょっと宴会で歌う歌なんかも。鈴木先生には僕、教えてくれって言ったことがあるんですから。そしたら「君が65になったら教えてやる」って。

鈴木：そうですか。当時の大学の先生がそうかもしれないですけど、お酒好きでみんなで食事するのをとても楽しむ感じですよ。

高橋：そうですね。だから……ただ、うまくできたもんで、横浜国大の間宮先生とかいろんな先生が研究所へ来て一杯飲んで楽しくやる。それから横浜国大に橋本重治²⁹先生とか金井達蔵³⁰先生とかいらっちゃって、そっちの先生方は飲まないんだ。そっちの先生方は図書文化社っていうのもう一つある心理検査の、そっちへ行かれて。こっちは飲んべえが来て向こうは飲まないのが行つたって言ってましたよ（笑）。橋本先生なんかほんとにお飲みにならないですから。だから歌は65なんなんうちに教わっとけばよかったのに。いっぱい覚えてらっしゃったんです。大塚の三業地で覚えたとかって。面白い先生でした。

鈴木清から教わったこと

最後に僕個人として鈴木先生から教わったこと2つだけ、いっぱいありますけど書いときます。うちの会社によく働く青年がいて、その青年が何となく酒臭いんですよ。今、自動販売機でどこでも売ってますからね。ヒューツと飲んできちゃうんです。それで運転していくもんですからちょっと危ないしやたらに心配になって。

「君、もう酒飲んだら首だぞ」と言って、「今度、酒のにおいがしたら、もうあしたから来なくていいよって言うよ」ってさんざん怒ったことあるんです。「君、こうやって飲んでどっかへぶつけてみろ、うちの社長、僕たちはみんな引っ張られるんだから」って言って。

彼は「ほんとに首ですか」って言うから「ほんとに首だ」と言ったら頑張って禁酒したんですよ。それで2日禁酒したんです、本人の話だと。3日目に会社でぶっ倒れちゃったんですよ。要するにアル中の人は頭がアルコール漬けになって、そのアルコールが切れちゃうとぶっ倒れるっていうんですよ。それからいろんなものが見えてくる。その辺、ネズミが走り回ったとか、窓から誰かが手を出して「おう」って言ったとか。小さい動物がよく見えるそうです。

それを鈴木先生が、「それはアルコール性せん妄症っていう病気だ」と、「これはとても高橋君とか社長たちの手に負えない。大塚だと墨田区に墨東病院がある。アル中専門の科がある。そこへ入れなくちゃ駄目だ」っていうことになって。今は本人が納得しないと入院できないですね。僕らが彼を入れた頃は両親と兄がいいって言えば入院させられたんです。今は駄目ですけど。それで急ぎょ、岩手県からお父さんとお母さんに出てきてもらって。そしてその墨東病院に彼を連れてって入院させたことがあるんです。

要するにアルコール性せん妄症はすごい怖いもんで、鈴木先生がいわく、「君もあんまり飲んでたらそうなるよ」って言われて、禁酒、深酒はやめようと。やっぱり少しずつ飲もうってなりました。

ただ、残念なんですよ。入院して2週間たつと、ほんとに真っさらになって出てくるんですよ。アルコール全部抜けて。で、駄目なんですよ。1週間、2週間で飲みだしちゃう。3回入院させたんですよ。3回目にさすがに、「もう、おまえ来なくていい」って、かわいそうなのですが「くにへ帰れ」って、岩手県に。やっぱり危ないです。ほんとに自動販売機って良くないですね。車運転してヒューッとやってきちゃうんですから。その当時、そのアルコール性せん妄症っていう病気のことを覚えて、自分もお酒はほどほどにしないと脳みそがみんなアルコール漬けになっちゃうって。それを覚えてます。

それからもう一つは、大学の先生たちに多いんですけど、僕となかなか波長が合わない先生がいらっしゃる。僕は普通に常識的だと思ってんだけど、向こうから見ると非常識だってなっちゃって。なかなかもう会いたくない先生が何人かいるんです。

そしたら鈴木先生がそれを遠くから見ておられたんですよ。一度、一対一でちょっと話があるって言うんで応接室へ行って話されて。「波長の合わない人ほど会わなくちゃ駄目だよ、君はまだ若いんだから。私が見てても分かる、波長が合っていないのは。そういう人ほど会わなくちゃ駄目だ。君は心理学科じゃないけど多少心理学やったでしょ。そのくらいのことは分かるでしょ」って言われちゃって。なるほどな、先生ちゃんと見てるなど。

やっぱりつまらないような顔をするらしいんです。鈴木先生は「君はあの先生と意識的に会え、会って話をしなさい」。それから一所懸命、鈴木先生から言われたんだからしょうがないと思ってやってるうちに、不思議に、行って会って何回かやってるうちに直ってくんですね、不思議なもんですね、人間って。会いたくない人ほど会え、けんか相手だって嫌になっちゃう人ほど会え。それが「君、少しはかじったでしょ、心理学を」なんて言われておだてられて。そういう病気と

いうか、性格を直したことがあります。そのおかげで、僕は会社の頃の営業やってましたから、どこ行っても平気になっちゃったんですね。どんなにいじめられてもどんなに悪口言われても、どんなにうちの売ってくれって言ってくれなくとも全然気にならない。2回、3回と行ってるうちに、じゃあ田中ビネーだけでもいいからやるかと、そういうふうになってくるわけ。だから波長が合わない人ほど会え。これ、普通の人から言われたんじゃ聞かないですよ。鈴木先生から言われたから、鈴木先生の言い方がお上手だから、もうクロツとその気になって。実際やってみたら波長が合わない人と頑張って会ってお辞儀しにいったら、何回かやってるうちに合ってるってことは確かにあるんだなと思いました。

その2つが鈴木先生から習ったことです。もっといっぱいありますけども、印象に残ったのはその2つです。今日、鈴木先生のことを大体、思い出したことを羅列したのがこの程度でよろしいでしょうか。

田研出版の心理テスト保存について

高砂：テストがいっぱいあるっていうのは先ほどありましたけど。田研の名前というか、鈴木清共著でもいろんなテストが出ているけれども、カタログはないわけですね。

高橋：今はもう。カタログはありますが、今、鈴木清先生の名が出てるのはないと思います。古いテストは探しても、日本文化も、もうないかな。

高砂：日本文化に行かなきゃ駄目でしょうか。

高橋：僕が、一番惜しかったのは道徳性の検査ですよ。あれは、例題が面白いですから。「野球部に入りました。だがどうも監督の先生と馬が合いません。何をやっても僕を信用してくれませんか。じゃあ僕はどうしますか」って、そんなようなテストがあったんです。

鈴木：どうこたえるのでしょうか。

高橋：まずは野球部をやめる。それからもう真面目にやらないとか。で、最後に先生を替えてくれって校長先生に言うとか。それが正解らしいんですよ。

鈴木：まさか（笑）。

高橋：（笑）。間違ってるかもしれませんが、そんなテストがあったんです。

名取：脱体育会系ですね。

鈴木：道徳は時代によって違ったりするでしょうからね。

高橋：だから思ってることを言わなくちゃ駄目だと。そういう例題がいっぱいある、面白いテストだった。ただ本当に面白いのは、鈴木先生は自由記述だって言うんですよ。「そういう時、どうしますか」、「じゃあ僕はこうします、こうします」と書かせなさい。そうすると子どもは進まなくなっちゃうんですよ。ぱぱっと書ける子もいるし、1問で止まっちゃう子がいるし。それで選択肢を作ってるんですけど、そうするとやっぱりテストとしてはあんまり面白くない。鈴木先生がおっしゃってましたね。自由記述で何とかデータ取れないか。自由記述は得意な子がいるけども、ピタッと止まっちゃう子がいて書けなくなっちゃう。

鈴木：カタログやテストの保存についてうかがいたいのですが、田研のほうにはカタログというか、テストは保存してないことを前に伺ったことがあるのですが、田研出版のほうにもないので

しょうか。

高橋：田研出版のほうはもう、田研出版になってからのテストですね。古いのある？

高橋一紀：ほほ、あると思いますが。

鈴木：そうなんですね。

高橋：田研出版は昭和 40 年にできてますから。40 年以降のものはほぼあるようです。

出版社、研究所の役割と特別支援教育

鈴木：テストの標準化作業で、出版社の社員は、どのような形でかかわっていくのでしょうか。

高橋：営業に回ってる社員が学校に顔が利くところがあります。そこ行って頼むんですよ。「これは無料です。結果はちゃんと報告します。必ず子どもの役には立ちます」営業だけです。

鈴木：研究者と現場をつないでくださってるわけですね。それで、田研から田研のテスターが派遣されてデータを取ってくるっていうような感じなんですね。

高橋：はい。ただ今はテスターがいなくなっちゃったですからね。だからなかなか難しくなっちゃってる。

鈴木：田研自体が縮小しちゃったんですかね。

高橋：はい。そういうことになってるし、昔ほどたくさんテストをやらなくなってますね。だから特別支援に行く子どもたちの調査だって、地元で見ると本気でやってないですね、測定は。まず字が書けない、九九ができない、返事が遅い、要するにちょっと遅い、のろい子が行かされてるみたいで。親の構図も昔と違ってだいぶ変わってきました。昔は特別支援とか特殊学級へ行きなさいって言うのが親がすごく悩んで反対したんですけど。今は悩む人と同じぐらいに、普通学級に行ってお客さんになるよりは特別支援に行ったほうがいいと。そういうふうにあっさり思う親も出てきます。だから正確に田中ビネーなんかやってないんじゃないかなと思うんです。特に WISC 関係はできる人は非常に少ないですから。ちゃんとやってんのかなと思って。

鈴木：小学校へうかがうと、特別支援学級に入りたい子が多くて、大きな規模の学校なんかだと何十人も特別支援学級に入る子がいる。校長先生は進学前の時期になると次年度の 1 年生の保護者からの相談がひっきりなしで、そんなに殺到されても、部屋もないし先生もいないし、「困った、困った」とおっしゃるのをうかがったことがあります。インターネットの時代だから、動画サイトに特別支援教育の良さについて保護者が投稿してるそうで、それ見て希望する保護者がいるようです。地域の教育相談所のように、特別支援教育が必要かどうかを考えるために検査を行う機関は、検査申し込みが多くて半年から 1 年待ちで、小学校に入学準備に間に合わないという話も聞いたことがあります。特別支援教育がこれだけ必要とされてくると、テストが昔とは違う使われ方をされているのだらうなと思うんですが。

高橋：ただ、確かに親の意識も変わってきてますね。普通学級でお客さんになるよりは特別支援で、一対一で教えてもらったほうがいい。だからこの辺でも特別支援に行けって言われて前のようにもめないですね。前はよくもめたんですよ。結局前もめたのは、どこの学校に入れたいっていうのは親が決めていいんじゃないか。本当は教育委員会が決めるんですけどね、盛んにもめて。今、あんまりもめないでちゃんと特別支援に行つて。毎日バスが来てくれるって喜んでる子がい

るんですよ。

ただ問題は中学なんですよ。6年終わって中学に行く時に、普通の中学校行きたいってなっちゃうんですよ。それから普通の高校行きたい。だから小学校6年間、一所懸命個人教授してくれた先生たちも、中学行ったら駄目になっちゃうっていうのが分かっているんですね。残念がってますが。

鈴木：なるほど。ありがとうございます。検査を使う側も、保護者側も随分変わってきてんですね。

高橋：でもまだ嫌だっていう子が、東京とか横浜以外はまだ多いんじゃないかな。それを一所懸命、教育委員会が説得するんですけど。でも前はほとんど100パーセント嫌だっていうのが、半分ぐらいになってますからね。

鈴木：出版社にうかがうお話ではないかもしれませんが、田中教育研究所のほうはそういった特別支援教育が必要かどうかという子どもたちも結構相談しに来てたんですかね。

高橋：多くはありませんが来てますね。みんなその地区の先生に言われて、その先生の言うことが半分信じられなくて、ちゃんとしたとこで調べてみたいっていうんで来るんです。でもやっぱり90%ぐらい特別支援のほうがいいっていう結果になるんですけども。研究所としても特別支援がいいですよとは言えないから、上手な表現で特別支援を薦めるみたいですけど。研究所はどうしても測定するだけだから、これは絶対特別支援ですよ、普通学級大丈夫ですよっていうことまでは、あと一步はなかなか、何となく言うんでしょうけども難しいとこなんです。

鈴木：公的な判定所じゃないですものね、田研は。

高橋：はい。でも何人か、ちょうど境界線ぐらいの子がいて悩んでたから研究所へ紹介したことがあるんです。そしたらもうすっかり受け入れて特別支援に行きましたよ。本当に専門のとこで見てもらって、やっぱりこっちがいいようなことを言われたってんで。

鈴木：なるほど。ありがとうございます。何かご質問等、大丈夫そうでしょうか。

杉原一昭、間宮武について

高橋：杉原一昭先生をご存じの先生は。

高砂：はい。私です。

高橋：一昭先生は筑波大附属中学校、高校の校長先生になられたことがある。

高砂：はい。

高橋：それで、「こんな高校でも悩みを持ってる精神的に弱い子がいるんだ」って。その子をどうして見分けるかってんで調査なさいましたよ。

高砂：そうですか。

高橋：はい。やっぱり何%か出るんですって。「進学校だからいいとか、有名学校だからいいってんじゃないよ、必ずいるんだよ」って。その子はどうするんだっていうんで教育カウンセラーの先生と相談してやってましたね。だから一昭先生が行かなかつたら気が付かないですよ、ああいう附属は勉強ばかりで。

高砂：そうですね。附属は結構大変だったのは、昔は、院の学生とかでも教職取りたいっていう

学生がいて。教育実習に行くのが筑波の附属ですからもうなめられちゃって大変だっていうのがありましたからね。そういう学生は先生によく文句言ってたような気がしますけど。私はむしろ最後の頃、担任とかされてた頃に杉原先生が、最後はたぶん糖尿病か何かになられて。

高橋：はい。

高砂：でも、お酒を随分飲まれてたんですね。甘い物が駄目だから、バレンタインデーとかいうとみんな学生が持ってくるんですけど、先生は食べられないから冷蔵庫に入れてある。それを狙って私たちみたいに外の学生が杉原研に行くとチョコレートがあるっていうので行くんですけど。私も幾つかもらって、好きなもんだから何も気にしないで食べちゃったんですけど、食べた時にすごい古いチョコレートが混ざってて。先生、全然気にされなかったけど口の中が思い切りすごい味になってたことがありました。すごく優しい先生で。鈴木清先生とはまた全然違って、子どもが体育のとにかく点数が悪いっていったらいいんだろうってって悩んでいたのを、一所懸命杉原先生、自分を、「もう小さい頃から体育が駄目で」って言って、自分の子どもに体育が駄目だってこんなふうになるからねっていう。体育の成績が悪かったっていうとこだけが、授業でよく覚えてるところですよ。

昔の教育大の先生だと思うんですけど、やっぱり夏になるとみんなで合宿に行ってとか、冬も合宿やっていましたし、杉原会って杉の子会っていうのを今でもやってます。もうお亡くなりになってだいぶたちますけど、今でもやっていますからね。

高橋：ええ。

高砂：すごく面倒見のいい先生だったんだっていうのは本当に思います。

高橋：間宮先生。

高砂：間宮先生の最後の頃にちょっとお酒の会で飲んで、こんなに昔の面白いことを知ってる先生に……と思っていたらお亡くなりになっちゃったんで聞き切れなかったんですけど、残念です。

高橋：間宮先生は面白かったですよ。間宮先生の「学校における非行対策」という講義が超満員になっちゃって。みんな生活指導、生徒指導のとんでもない生徒扱ってる先生たちがわんさか来て。それで質問されるんですけど、なかなかさすがの間宮先生だって即答できないです。一昭先生は2つぐらいいは僕より若いかな。だからすごく頼りにしてたんですけどね。今の所長の1つ前が杉原一昭先生だった。

高砂：そうですね。

高橋：今の所長の杉原隆³¹先生は鈴木先生の弟子で。

鈴木：そうですか。

高橋：はい。鈴木先生の助手です。高校時代は100メートルの三重県の記録を持ってた先生です。最近破られたって言ってたな、記録を。

鈴木：最近ですか。すごいですね。

鈴木：さて、お時間をだいたい過ぎてしまいました。今日は大変貴重なお話をうかがえて、非常に素晴らしい時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

おわりに

高橋のインタビューは、具体的な鈴木とのやり取りや人物像を中心として、他の研究者たちとの関係から今日の特別支援教育に至るまで多岐にわたった。全てのエピソードが興味深いのが、ここでは、心理学の研究者と現場との関りに焦点を当て、江口(2010)のまとめた、教育測定の世界を踏まえて、鈴木の世界を考えてみたい。

江口(2010)によれば、田中寛一は「(見知らぬ人でも互いに助け合うような)横の道義」が発達しているかどうかという点から、封建的か民主的かを位置づけていた。そして、個性を民主主義と関連づけて「人格平等観」と「個人差への着眼」の2つの意味にわけて論じ、新教育の方法にみられる「自主的に事を行い、相互扶助の訓練を得させる」という点が「わが国民の道義の上で最も弱点とするところ」を克服するものだと考えていた。そこで、戦後の教育が目指した民主主義的な教育にとっては、教育測定研究は不可欠なものとして紹介されていた。日本教材研究所から田中教育研究所への改称は、1951年1月に田中の功績を記念して行われたが、それとともに『測定と評価』研究会を中心とした研究所活動に対する需要が高まり、その活動が設立当初に比べて拡大していたという現実的な必要もあって進められた。研究所は教材を開発するだけではなく、その利用法を指導する役割を果たすようになっていて、田中教育研究所では、研究部と指導部に加えて、新たに附属教育相談所が開設された。1952年2月に初めて出版された『臨床心理』には、教育相談所において受付けた相談事例も収録されていた。田中は『評価と測定』を『教育心理』と改題した最初の号の巻頭語で「教育改善に対して、心理学的立場からする貢献は、単に測定と評価からだけでなく、いわゆる教育心理学で研究している諸方向を含むべきである」と述べている。江口(2010)によれば、「彼らが一貫して重視していたのは、教育現場との関係」であり、この時期の取組は、実践との関係を重視して進められてきたと考えられる。

江口(2010)によれば、鈴木は田中の教育測定研究を引き継いだ一人である。今回のインタビューにより、財団法人の認可の際には主導的な立場にあったことがわかった。その後の検査の標準化のエピソードとともに語られるテストの体制の話や講習会でのやり取りから、現場の教員とのやり取りが重視され続けていたことがわかる。鈴木の研究活動もまた、常に現場が意識されたものであったといえよう。教育委員会や役所の仕事の依頼への対応は、田中研究所の文化の継承と考えられる。また、道徳教育の研究や道徳性の検査の作成については、「横の道義」の大切さを説いた田中の流れを汲むものとの解釈もできる。しかしながら、誰でもよかったわけではなく、鈴木でなければならなかった理由も見えてきた。

英語力が強みの一つとなったのは間違いない。加えて、インタビューから見えてきたのは、どんな人とも付き合うことのできる包容力、調整力、忍耐力である。所員会議での振る舞いや、高橋に送った「波長の合わない人はど会わなくちゃ駄目だよ」との金言は、鈴木自身がどんな意見でも聞く耳をもっていた様子を伺わせる。そのために、困難な課題を調整、解決する課題が役所から持ち込まれたのだらうと推測できる。また、道徳性検査に見られるようなユーモアのセンスが様々な人々とのやり取りを円滑に進めたのであろう。語られる鈴木の様子は、上から助言を

する研究者ではない。現場と共に歩むため、より良い実践を考え続けている教員仲間という姿勢であった。

今日、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められている(文部科学省初等中等教育局教育課程課, 2021)。教育心理学をはじめとする研究者たちが、学習環境デザインに参加している場合も見られるが、その先駆的な取り組みとして、鈴木や田中研究所の取組を見直す必要もあるだろう。

謝辞

高橋徹さんには長時間のインタビューにご協力をいただいた。サポートくださった高橋一紀さんも含め、心より感謝を表します。

付記

本研究は、科学研究費補助金(19K0336 心理検査開発者オーラルヒストリーによる日本心理検査史)の助成を受けたものです。

文献

- 江口 潔(2010). 教育測定 of 社会史: 田中寛一を中心に 田研出版
- 北海道教育大学(2013). 平成 25 年秋の叙勲 北海道教育大学学報 Retrieved April 12, 2023 from https://www3.hokkyodai.ac.jp/gakuhou/201312_535/frame_44.html
- 一般財団法人田中教育研究所(2023). 田中教育研究所について 田中教育研究所 Retrieved April 8, 2023 from <http://www.maroon.dti.ne.jp/tier/about.html>
- 文部科学省初等中等教育局教育課程課(2021). 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実 文部科学省 Retrieved November 13, 2023 from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiouen/mext_01317.html
- 日本教育新聞社(編)(2014). 現場の課題に応える教育センター(57) 教育の科学化を初心に、心理学の成果を生かす: 一般財団法人・田中教育研究所 週刊教育資料, 1325, 32-33
- 大泉 溥(2003). 日本心理学者事典 クレス出版
- 小学館編(1994). 日本大百科全書 小学館
- 鈴木聡志・安齊順子・鈴木朋子(2011). 品川不二郎氏に聞く ― 戦後の日本への臨床心理学の導入者 心理学史・心理学論, 12・13, 1-12.
- 鈴木朋子・鈴木聡志・安齊順子(2016). ウェクスラー式知能検査本邦導入の背景: 品川不二郎・孝子へのインタビューから 横浜国立大学教育人間科学部紀要, II, 人文科学, 18, 1-18.
- 田研出版株式会社(2023). 田中教育研究所について 田研出版株式会社 Retrieved October 29, 2023 from <http://taken.co.jp/tanakainstitute.html>

注

- 1 田中寛一(1881-1962) 1907(明治 40)年、東京高等師範学校英語科卒業。1913(大正 2)年、京都帝国大学文科大学哲学科心理学専攻卒業、東京帝国大学大学院に進学、東京高等師範学校講師、後に教授。1929(昭和 4)年、東京文理科大学教授。1945(昭和 20)年、日本大学教授。1947(昭和 22)年、玉川大学学長。専門は、人間工学、

- 教育心理学、教育測定、知能検査(大泉,2003)。
- 2 品川不二郎(1916-2012)。1942(昭和17)年、東京文理科大学教育学科心理を卒業後、東亜研究所嘱託としてジャワ島派遣調査団員。復員後に玉川大学予科教授、助教授、米国ミネソタ大学への留学を経て、1951(昭和26)年、東京学芸大学助教授、のちに教授。専門は、教育心理学、児童相談(大泉,2003)。
 - 3 日本文化科学社は1948年に日本教材研究所として設立された心理検査出版社。1965年、日本心理適性研究所設立。2007年同研究所をテスト編集部に名称変更(日本文化科学社,2021)。
 - 4 田研出版株式会社は1965(昭和40)年設立。現在は、財団法人田中教育研究所の出版部門として、田中教育研究所が研究開発した心理検査の発行や講習会の開催を行っている。
 - 5 筑波大学は、1872(明治5)年の学制発布に伴い「師範学校」として開設された。翌年に、大阪、仙台、広島に師範学校が開設されたため、「東京師範学校」と改称された。1886(明治19)年に制定された師範学校令により、「高等師範学校」となり、1902(明治35)年に広島に高等師範学校が出来たことにより、「東京高等師範学校」となった。1929(昭和4)年、「東京文理科大学」が新設され、東京高等師範学校は附属となった。1949(昭和24)年、東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校が合併されて「東京教育大学」となった。1973(昭和48)年に総合大学としての「筑波大学」となった。
 - 6 本研究は、科学研究費補助金(19K0336 心理検査開発者オーラルヒストリーによる日本心理検査史)の助成を受けた。
 - 7 武政太郎(1887-1965)。東京高等師範学校本科英語部卒業後、愛媛県師範学校教諭を経て、1921(大正10)年、東京高等師範学校専攻科修身教育部卒業、東京帝国大学文学部心理学科へ進学、検定合格により卒業資格を取得。1929(昭和4)年、東京文理科大学助教授兼東京高等師範学校教授、1944(昭和19)年、同大学教授となるが、1947(昭和22)年、公職追放。その後、神奈川大学教授、大妻女子大学教授などを歴任。専門は、発達心理学、教育心理学(大泉,2003)。
 - 8 長谷川貢(1897-1990)。茅ヶ崎の小学校に教員として勤めた後、1921(大正10)年に神奈川師範学校卒業、1932(昭和7)年日本大学法文学部文科心理学専攻卒業。1944(昭和19)年、日本大学予科教授、日本大学助教授を経て、1950(昭和25)年に日本大学教授。専門は、風土心理学、価値と情操の心理学(大泉,2003)。
 - 9 間宮武(1915-2000)。東京高等師範学校卒業後、1941(昭和16)年に東京文理科大学教育学科心理学専攻を卒業。神奈川県師範学校教授を経て、1950(昭和25)年に横浜国立大学学芸学部助教授、1962(昭和37)年に同大学教授。専門は、教育心理学、青年心理学、性差の心理(大泉,2003)。
 - 10 田中英彦(1916-2001)。元東京教育大学体育学部教授。
 - 11 清水利信(1926-)1951(昭和26)年、東京文理科大学心理学科卒業。国立大学研究員の文部教官を経て、1958(昭和33)年、横浜国立大学学芸学部講師、1970(昭和45)年、同大学教授。専門は、教育心理学。
 - 12 高橋一紀氏より提供された1972年の田中教育研究所要覧には、研究所職員として、鈴木清(所長)、四方実一(副所長関西支部長)、田中英彦(副所長)、長谷川貢・田崎仁(名誉所員)、佐藤正・間宮武・都留宏・品川不二郎・渡辺秀敏・林保・清水利信・岡本夏木・森上史朗・北尾倫彦・加賀秀夫・河井芳文・杉原一昭・杉原隆・藤巻公裕が載っている(表2参照)。
 - 13 学校群制度は、1967(昭和42)年度に東京都で最初に導入された。公立高等学校の選抜制度であり、2~3校の群ごと合格者が選抜される制度である。東京都では1882年度から学区ごとのグループ合同選抜方式へ変わっている(日本大百科全書,1994)。
 - 14 後藤岩男(1904-1949)。静岡師範学校卒業後、尋常小学校訓導として勤務。1930(昭和5)年、東京高等師範学校文科第一部卒業、1933(昭和8)年、東京文理科大学教育学科心理学専攻卒業。東京高等師範学校助教授、教授を経て、1949(昭和24)年、東京教育大学教授になるも同年に現職のまま逝去。専門は、ゲシュタルト心理学、障害児心理学(大泉,2003)。
 - 15 杉原一昭(1937-2008)。1961(昭和36)年、東京教育大学心理学科卒業。横浜国立大学教育学部講師、助教授を経て、1977(昭和52)年、筑波大学心理学系助教授、後に教授。専門は、児童心理学。
 - 16 寿原健吉(1913-1983)。1939(昭和14)年、東京帝国大学医学部卒業。北海道帝国大学助教授、国立ろう学校教授を経て、1951(昭和26)年、東京教育大学教授。専門は、障害児教育。
 - 17 岩原信九郎(1923-1978)。1944(昭和19)年、東京高等師範学校卒業、1947(昭和19)年、東京文理科大学教育

- 学科心理学専攻卒業。米国ミズーリ大学で M.A., Ph.D. を取得後、奈良女子大学講師、助教授を経て、1962(昭和 37)年、東京教育大学助教授、1972(昭和 47)年、同大学教授。専門は、心理統計法、生理心理学(大泉, 2003)。
- 18 上武正二(1909-1983)。1935(昭和 10)年、東京文理科大学教育学科心理学専攻卒業。1936(昭和 11)年、東京高等師範学校助教授。1939(昭和 14)年、東京文理科大学助手。ベルリン大学留学を経て、1949(昭和 24)年、東京幾大学助教授兼東京高等師範学校教授、1952(昭和 47)年、同大学教授。専門は、発達心理学、遺伝と環境の問題(大泉, 2003)。
- 19 原野広太郎(1930-1994)。1958(昭和 33)年、東京教育大学大学院心理学専攻博士課程修了、同大学助手に就任。東京教育大学教授、スタンフォード大学客員教授を経て、筑波大学教授。専門は、臨床心理学、カウンセリング(大泉, 2003)。
- 20 小保内虎夫(1899-1968)。1924(大正 13)年、東京帝国大学文学部心理学科卒業、同大学院へ進学。1926(昭和 20)年、東京高等師範学校教授、1945(昭和 20)年、東京文理科大学教授。1949(昭和 24)年、東京教育大学教育学部教授。専門は、実験心理学、視知覚の心理(大泉, 2003)。
- 21 辰野千壽(1920-2016)。1944(昭和 19)年、東京文理科大学教育学科心理学専攻卒業。東京文理科大学助手、東京教育大学講師、助教授を経て、1955(昭和 30)年、東京教育大学教育学部助教授、1967(昭和 42)年、教授。1973(昭和 48)年、筑波大学副学長。1978(昭和 53)年、上越教育大学学長。専門は、教育心理学、学習心理学(大泉, 2003)。
- 22 大黒静治(1930-)。北海道教育大学名誉教授。非行傾向の早期発見の研究を行った(北海道教育大学, 2013)。
- 23 TK 式非行傾向診断検査 (DEL) は、1966 年に発表。1981 年には、改訂版 TK 式非行傾向診断検査 DEL として田研出版株式会社から発売された。改訂版 TK 式 DEL 検査は、一般財団法人田中教育研究所編として、現在も田研出版より販売されている。DEL を取り入れた検査として、性格・向性・適応傾向 (非行傾向) を把握する TK 式 M2-DV + がある。TK 式 M2-DV + は、知能を測定する M2-TA と組合せたテストバッテリーとして、全国の高校で利用されている。DEL、改訂版 TK 式 DEL 検査、TK 式 M2-DV + は田研出版高橋一紀より提供を受けた。
- 24 辰見敏夫(1919-2005)。1946(昭和 21)年、東京文理科大学教育学科心理学専攻を卒業。東京学芸大学助手、講師を経て、1956(昭和 31)年、東京学芸大学教育学部助教授。1969(昭和 44)年、同大学教授(大泉, 2003)。
- 25 鈴木・安齋・鈴木(2011)や鈴木・鈴木・安齋(2016)のことである。
- 26 田研出版 高橋一紀によると、日本文化科学社内の田中教育研究所に芸術性研究部があり、日本文化科学社社長であった茂木茂八の声かけで開発され発売された検査である。茂木によって雇われた東京芸術大学学理科卒の学生が加わり、検査レコードが作られ、コロムビアより発売されたが売れず、芸術性研究部も解散した。
- 27 河井芳文(1936-1989)。東京教育大学大学院教育心理学博士課程満期退学。東京学芸大学助教授、教授。専門は教育心理学。
- 28 新井邦二郎(1947-)。筑波大学教授、東京成徳大学教授。
- 29 橋本重治(1908-1992)。1938(昭和 13)年、東京文理科大学心理学科卒。埼玉師範学校教諭、山口大学教育学部助教授、横浜国立大学助教授を経て、1960(昭和 35)年、東京教育大学。専門は、教育心理学、教育評価、肢体不自由児の心理(大泉, 2003)。
- 30 金井達蔵(1916-2007)。1943(昭和 18)年、東京文理科大学教育学科心理学専攻卒業。神奈川師範学校助教授を経て、1951(昭和 26)年、横浜国立大学学芸学部助教授、1965(昭和 40)年、同大学教授。専門は、教育心理学、教育評価の研究(大泉, 2003)。
- 31 杉原隆(1942-)。東京学芸大学教育学部教授。専門は体育学。

(なとり ひろのり／教育心理学・発達心理学)

(すずき ともこ／臨床心理学・心理学史)

(たかすな みき／心理学史)